



秘伝鴉斬
りの剣

川崎ゆきお

磯川という剣の達人がいると聞いて、若武者はその山荘を訪ねた。かなりの高齢で、隠者に近い。当然弟子はもう取っていない。若武者はこういうところで秘伝を伝授され、今までとは違う強い若武者に変身していく……と、期待された。

深山幽谷ほど深い山ではないが、辿り着くまでかなりの日数がかかった。あの山の山麓だと教えられ、行ってみると、炭焼き小屋がある程度。すると、達人は炭焼きをしながら、余生を送っているのかと、その小屋で三日ほど待った。炭を焼きに山に入ったときだけ寝泊まりするような小屋なので、用がなければ炭焼き人も来ない。結局来たのは中年の猟師で、達人ではなかった。

そういう間違いが何度もあり、やっと目指す隠者の住む山荘を探り当てた。ここまでは苦労と言うほどのことではないが、他の武芸者が知らない達人だけに、穴と言えば穴だ。人気のある達人は、よく知られており、訪ねる人も多い。

山荘の隠者は領主だった。といっても、狭い谷間を領しているだけで、百姓家が数戸ある程度。ただ、先祖代々の領地で、狭いのは飛び地のためだ。つまり、先祖が昔立てた手柄の恩賞で頂いた土地なのだ。当然、誰もそんな場所に行かない。年貢も請負人に任せているが逆に赤字になる。

そんな僻地に、自分の領地があることを知った達人は、年取ってから、ここに引っ越した。

「秘伝かな」

「そうです。剣の極意を」

「そんなものはない。剣客が勝手に言いだしたものでな。刀で人を斬るなんて、滅多にない」

「はい、でも、先生は達人だと聞きました」

「ああ、達人株を買っただけのことだ」

「そんなのがあるのですか」

「まあ、それで、しばらくは商売になった。門弟から金を巻き上げるだけの話だからな。まあ、その見返りに免許を与える。これもただの紙切れを丸めたものだ。何も書かれてはおらん。分かり切ったことしか」

「あ、はい」

「だから、極意などないし、そんなものを必要とするのは、同業者だけだよ」

「秘伝の技。鴉返し斬りがあると聞きました」

「ああ、昔はそんな嘘を付いたこともある」

「飛ぶ鴉を斬るとか」

「届かんよ」

「そうですね。しかし聞いた話では、そっと近付き、一気に」

「殺気を殺して、何とか何とか、インチキ臭いことを言ったものだ。今考えると、恥ずかしい」

「はあ」

「わざわざこんなところまで、来たんだ。秘伝鴉返しをやるのか」

「あ、はい」

老人は物置から、巻物を持ってきた。

「ここに書いてある。やり方が」

「はい」

「そんなことは実際にはできんがな」

「いえいえ」

「それで、免許皆伝となる」

「いかほど必要でしょうか」

「もういい。持って帰りなさい。それで役立つのなら」

「はい、ありがとうございます。師匠」

「門弟はもう取らんから、師匠じゃない」

「失礼しました。先生。しかし、何かお礼を」

「まあ、今夜はもう遅いので、ここに泊まっていきなされ、そして夜話で、諸国のことなどを話してくれるか。そういうのを聞くのが好きでな」

「はい、分かりました」

その後、この山荘から、若武者が降りてくる姿を見た者は誰一人としていなかったとか。

了